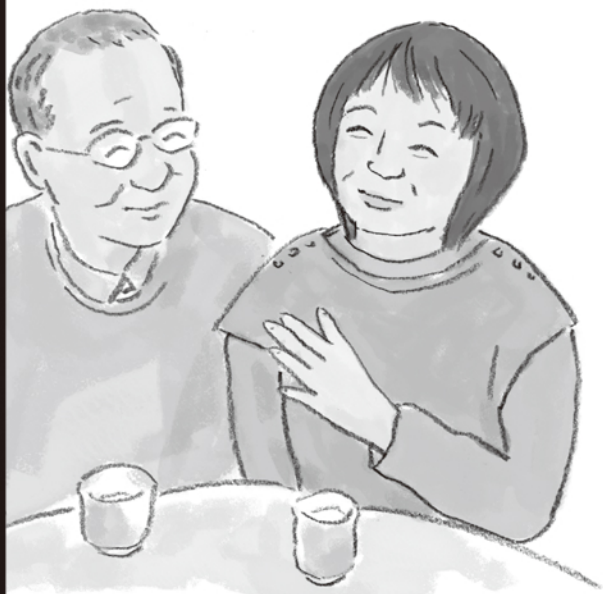


## 病気をとおして、目を上げれば そこに宝があることに 気づきました。

熊本教会 藤本晃子さん

2010年7月、藤本晃子さんは脳出血で倒れた。一命は取り留めたものの左半身がまったく動かない。リハビリが始まり、一進一退する回復の中で苛立ちと不安が募り、心が折れそうになる日々。ふと、一つの思い出がよみがえる。それは昔、二男(当時6歳)が川で溺れて亡くなった時、悲しみの底に沈み、自らを責め続けていた藤本さんに、支えてくれた家族と仲間が、「自分は一人じゃない。息子の命を背負い頑張って生きなければ」と気づかせてくれたのだ。いまも自分のまわりには、仕事をこなしながら家を守ってくれる夫がいる。やさしく励ましてくれる仲間や病院のスタッフがいる。一人ひとりみな、自分の宝だ。そして、この体、そして命という大事な宝がある、と心からそう思った。その後、懸命にリハビリに取り組む。現在では、一人で車を運転できるほどに回復。ありとあらゆる「おかげさま」のなかでいま、ここに生をいただいている自分に気づいた藤本さんの視線は常に上を向いている。



## お世話になる、ということ

人生の終盤になるとたいていの人は、なんらかのかたちで人さまのお世話になる可能性があります。そしてそのときには、迷惑をかけたくないとか、お世話になるのは心苦しいという気持ちが働きます。また、そのことを気に病み、自分の存在価値すら疑う気持ちが生まれるとも聞きます。けれども、病気の人は病気の姿を、年老いた人はそのありのままの姿を見せることで、人に大事なことを伝えていようと受けとめることができます。介護など人さまのお世話になるといって、ただ受ける一方のように感じますが、じつはそのとき、その人はその人にしかできない布施ふせをさせていたただいているのです。

仏教では、布施をする人と布施を受ける人、それに布施するものすべてが清浄せいじようであって初めて「布施」が成り立つと教えています。その意味では、お世話をする人が「お世話をさせていただけでありがたい」という気持ちで接し、受ける人が素直に感謝して「布施をさせていただけでありがたい」との思いで「ありがとう」と応えこたえられたら、そこに血の通った交流やお互いの成長があるといえそうです。

# 立正佼成会